

第2章 暮らし

いま政府は、「地域生活移行と地域生活支援体制の充実」を大きな課題にあげています。しかし、政府のいう「脱施設化」で、希望する社会サービスや支援を得ながらの安心した地域生活ができるのでしょうか。「集団生活から個人の生活へ」「施設のような規制の多い生活から少ない生活へ」「依存生活から自立生活（自己決定）」などのスローガンは、「施設」から「地域」に移行することで本当に解決できるのでしょうか。施設に暮らす仲間たちとの実践から考えます。

1 暮らしをつくる

(1) 育代さんの朝

「いくよさん、おはよう！」

朝の着替えを終えるとウッドデッキに出て太陽を浴びます。陽射しと風を感じてもらいたい毎日のとりくみです。育代さんは、重度重複障害があり全盲の女性です。自分から意識的に動くこと、泣いて訴えること、笑顔でこたえることが困難です。

夜から朝への変化にメリハリをつけるため、「朝はアップテンポな音楽やラジオ放送」「朝日を浴びよう」のとりくみが継続的にされています。

リビングでは魚の焼ける匂いや野菜を切る音がして食事の準備が始まっています。食事はきざみ食です。食事の際は口に運ぶものを伝え、スプーンを鼻に近づけてから食事をします。仲間や職員は育代さんの表情をみて、好きなもの、苦手なものを感じ、今日の体調を捉えています。スプーンを握り、口に運ぶことやコップを手添えで持つことを通して、食事時間の意識を高めるようにしています。仲間たちと職員は、仕事のこと、テレビのこと、健康のことなどを育代さんににぎやかに話します。

午前中は仕事の時間です。自助具の輪に布をくり付け、手添えでウェアを裂きます。仕事は生活の軸となり節目となります。共同して作り上げる喜び、社会との関わりの中で給料をつくり出す活動にもなっています。

午後は、リハビリと入浴です。リハビリは、訓練リハビリと生活リハビリを行います。着替えの時はバンザイをして上肢を伸ばし、靴下を履く時は足首をゆくり動かします。入浴は、ゆったりとした気分で湯につかりながら、一日のことを語り合う時間です。好みの香りのシャンプーやボディソープを準備し、好きな匂いに囲まれながら、「快」が感じられます。



入浴後の水分補給が終わる頃になると、夕方の放送が流れます。今日の夕方の活動、今夜のお勧めテレビ番組、明日の日課が仲間と職員から伝えられます。順番で放送をする仲間の趣味や興味のあること、明日の予定や見通しがわかる時間です。草木に水撒きをする楽しみの時間でもあります。

夕食後は、お茶を飲みながら日記を書く仲間、洗濯物たたみを手伝う仲間がいます。育代さんは居室に戻りゆったりした曲を聴いて眠りに入ります。大地でのいつもの一日が流れていきます。でも、こうした育代さんの暮らしを支える活動は、現在の制度ではほとんど報酬の対象になりません。

そんな育代さんが先日42歳の誕生日を迎えました。

「がんばって、がんばって、きょうを迎えた育代に乾杯です。ビールを含ませると洪い顔でした。母のつくったミルクケーキには、舌鼓をうつて。また、明日に向かう新たな歩みがはじまります。みなさんよろしくお願いします」とお母さんが綴ってくれています。これはみんなの大きな喜びです。

(2) 小さな変化や発見を見のがさない

育代さんは、食事がとれず、生活リズムが崩れ、不眠が長く続くことがあります。健康面、医療面への配慮が実践の大半を占め、体調を崩さずに過ごすことが中心的な目標となります。すると、日々の食事量、体重の推移、排泄、睡眠などが観察の重点に置かれ、「眠れたかどうか」「食

事がとれたかどうか」という内容が大半を占めるようになります。

ある日の食事の時のことです。酢の物を口に入れると、育代さんは眉間にしわを寄せ口をへの字に曲げました。一緒に食事していた仲間がこれに気づいて、「昔から酸っぱい物は好きじゃない、食べるのがイヤなんだと思う。甘いものが好きだから、他の物から食べ始めた方がいいよ」と教えてくれました。仲間は育代さんの表情や気持ちをとらえ気にかけていたのです。一方、職員は育代さんの健康や体調ばかりに気をとられていました。食べたか、食べなかったかだけに着目し、表情や変化を見逃していたことに気づきました。

育代さんがなかなか食べ始めない時は、そばにいる仲間から「私のご飯を見せてあげる。二オイをかいだら食べられるかも」と五感を使ったアプローチが提案されます。どんな顔をしていたのか、きつと〇〇と思っているかもしれないなど、仲間たちが育代さんの表情やその変化を読みとり、発信してくれる場面が多くなっています。こうした仲間からの発信や思いやりは、一人ひとりが大切にされている実感と暮らしをつくり、わちあう共感から生み出されているのです。

育代さんは、重度の障害があっても、様々な関係を仲間たちと築きながら暮らすようになっていきます。それは、周りに自分のことを思ってくれる人がいるようになり、理解し発信してくれる仲間と一緒に笑いあえる仲間が増えたりすることによって、つくられたのです。職員は、主観や思いだけに偏らないよう小さな変化を観察し、科学的な根拠（発達や障害の理解、学習など）からとらえ、その視点を集団に広げ、共通のものにすることが求められています。